

ごあいさつ

去る6月27日に、東アジア文化交渉学会の発会式が関西大学100周年記念会館で盛大に執り行われ、続いて第1回年次大会も成功裏に開催されました。22の国と地域から約240名の発起人の賛同を得て結成したこの学会の初代会長として、ここに、発起人、役員および顧問の皆様深く感謝の意を表わすと同時に、次のような二つの展望を示したいと思えます。

第一に、学会の発足自体はある意味で、関西大学文化交渉学教育研究拠点(ICIS)が提唱する「文化交渉学」のコンセプトが多くの方々理解を得たことの証でありましょう。しかし、「文化交渉学」という学問体系を確立させることは、まさに「任重くして道遠し」というべきで、人文学・社会科学における多くの関連分野の方々の尽力と協力を待たなければなりません。その意味で、東西言語に関する文化交渉的研究分野でリードしている『或問』誌がこうした尽力と協力の模範といっても決して過言ではありません。このような専門分野での研究の結晶体が多くなればなるほど、「文化交渉学」という学問体系がよりいっそう豊かで精巧に構築できることでしょう。

第二に、内藤湖南が早くも大正末期に、「国民とか民族とかいうものが世界に存在する目的は、単に富を作るにある」のではなく、「世界の人類を向上せしむべき文化を作るにある」、「天然を征服するということが決して真の文化ではない。民族生活の極度のものではない。その上に天然を醇化……即ち天然を保護し育成して天然の中に安んじ得る程度になるところのものが即ち真の文化生活であらねばならぬ」と指摘しております。我々の文化交渉研究が、一方ではそれ自体の学問的な意味を、他方では世界各国の相互理解および人類の自然との共生に寄与するという現実的な意味を持つことはおそらく不可能ではないでしょう。とすれば、「文化交渉学」の構築に取り組む仕事の意義がよりいっそう広く認知されることでしょう。

東西言語文化接触研究会の代表である内田慶市先生と編集者である沈国威先

生はそれぞれ東アジア文化交渉学会の副会長、事務局長を担当しておられます。末筆ながら、学会の創設に多大な尽力をされたお二方に深謝申し上げると同時に、本『或問』誌のさらなる発展と繁栄をお祈りしまして、私の挨拶に代えたいと思います

2009年7月26日

東アジア文化交渉学会
会長 陶 徳民